

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
April 2018

No.27

【特集】

地域におけるアートの役割

近年、アートをまちおこしやコミュニティ再生に役立てようとする動きが活発です。また、教育現場や企業活動などでデザイン・アート思考を取り入れ、実践する試みも行われています。特集ではそのような現状を踏まえつつ、「よりよい社会」を目指すアートやデザインの可能性を探ります。





Photo by Michi Kaga

山のように積もった雪が解け、ようやく地面が顔を出したのが3月中旬のこと。春の訪れを探すにはまだ早いかなと思いつつ、カメラ片手に散歩してみると、かわいらしい福寿草たちが競うように上を向いて咲いていました。白一色の冬を一瞬で春に変えてくれるような眩しい光景の発見に心が躍りました。(本誌 P.27参照)

CONTENTS

FIRST WORD ● 遠山敦子
2018年度によせて 2

特集：地域におけるアート役割

国内助成プログラム ● 西山佳孝
Koshiki DESIGN CAMP を通じた
デザインが拓く地域の可能性について 5

研究助成プログラム ● 蓮行
アート×地域×大学が社会に新たな価値を創り出す 8

国際助成プログラム ● 門脇 篤
コミュニティにおける「アート」の可能性 11

山岡義典さんに聞く③ 永田賢介
社会のなかに大らかな空間と時間をつくる 14

2018年度 事業計画 16

追悼 ● 豊田達郎名誉会長インタビュー再掲
たくましく、心あたたまる活動の継続を 20

「私」のまなざし ④ 黒河内寛之
シュランの咲く里山——これからの時代の里山管理—— 22

国内助成・研究助成プログラム
プロジェクト一覧2017 24

お茶っこ通信 第八回 ● 加賀 道
多様な人々の巻き込み、ただいま実践中！ 27

トヨタ財団ジャーナル 28

- 助成対象者との対話(ダイアログ)を実施しました
- 伊那市立伊那北小学校6年1組の児童たちによる研究報告会 他

日頃より、私どもトヨタ財団の活動につきまして、ご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。二〇一八年度の冒頭にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

今年、明治維新から百五十周年にあたり、NHK大河ドラマ『西郷どん』でも描かれているように、驚かされるのは、明治維新の大舞台で活躍した立役者たちの若さです。一八六八年の維新の時点で、維新三傑の中で最も高齢な西郷隆盛ですら四十歳です。残る二人の大久保利通、木戸孝允、さらには彼らに対して幕藩体制を守ろうとした幕府側の十五代将軍である徳川慶喜、あるいは会津藩主松平容保らもいずれも三十歳台です。近代国家を作り、鎖国を終焉させ、西列強のひしめく国際社会に乗り出すという大事業を成し遂げた活力の源泉の一つは、この若さであったでしょう。当時人生五〇年時代であったとはいえ、社会を前向きに動かす原動力は、今から見ればその若さと意思と実践の力です。

現在の日本社会においても、この若い力が健在なことを見せたのが、先日、平昌冬季オリンピックとパラリンピックでの日本選手団の活躍でした。映像を通して流れてくる日本選手たちの躍動する身体から、若々しいエネルギーが伝わってまいりました。かのクーベルタン男爵が、「オリンピックというものは、単なる選手権ではない。それは四年に一度の『人類の春』とでもいふべき普遍的な若さの祭典なのだ——la fête quadriennale de la jeunesse universelle, du printemps humain——」と語った意味が納得できます。この日本選手団

2018年度によせて



公益財団法人 トヨタ財団理事長
遠山 敦子

の活躍の結果として、平昌冬季大会ではいずれも過去最高のメダル数でした。二年後に開催される、東京オリンピック・パラリンピックへの良い流れを作ってくれたと思います。ことに、このメダリストたちの多くが、自らの出身地である地域社会との絆を大切にしている姿にも強い感銘を受けます。例えば、男子フィギュア・スケートで連覇を果たした、宮城県出身の羽生結弦選手は、ご本人の金メダルが、宮城県をはじめとする東日本大震災被災地の人々に、笑顔をもたらしてくれたら、と語っていました。また、「そだねー」という微笑ましい響きの言葉とともに、女子カーリングを戦い抜き、銅メダルを勝ち取ったLS北見の選手たちも、地元で愛されていることがよくわかります。活躍する選手たちとの間に、このような絆があるということ自体、日本の地域社会の秘めた底力を示すものではないでしょうか。

の若いエネルギーを日本社会から一層引き出すには、何をなすべきでしょうか。二〇一八年度のトヨタ財団の事業計画は、この考えもベースに作成いたしました。これまでの国内、研究、国際という助成活動の大きな三つの柱とそれぞれ基本テーマは堅持しながら、絞り込まれたテーマに焦点を当てて助成を行う「特定課題」を機動的に立ち上げる、また助成の対象となる研究者の年齢を若い層にフォーカスする、あるいは過去の助成対象案件を評価したうえで新たなプロジェクトの立ち上げを考察するなど、助成の効果を一層上げるべく新たな試みにチャレンジします(詳細に関しては、後掲されて

社会や人間のあり方に大きな影響を及ぼそうとしております。二一世紀の未来は、予測し難い展開となる予感がいたします。そうした動きを注視しながらも、トヨタ財団としては設立以来の理念である、「人間のより一層の幸せ」を目指すため、今後とも地道な助成を継続して参る所存です。二〇一八年度においても、皆さまの一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

いる事業計画の解説をご覧ください。

このところ世界の情勢は、超大国のリーダーたちが強権力を持統するために任期を延ばし、あるいは自国中心主義を赤裸々に打ち出してこれまでの国際秩序を揺るがしはじめました。さらに科学技術の発達は加速度的であり、今やIoTやAIが人間の能力を超える働きを見せ始めるなど、今後の

Koshiki DESIGN CAMPを通じた デザインが拓く地域の可能性について

西山佳孝 (東シナ海の小さな島ブランド株式会社)

2015年度 国内助成プログラム助成対象

[助成題目] Koshiki DESIGN CAMPを通じた島の未来を照らすしごとづくりプロジェクト



鹿児島県甬島の里地域からの眺め。近島や野島、双子島などが見える

●●●●●
鹿児島県甬島で
DESIGN CAMPをスタート

本稿では、デザインという壮大すぎるテーマに触れながら、鹿児島は薩摩半島の西にぼつかりと浮かぶ甬島で行われているDESIGN CAMPの取り組みについて紹介したいと思います。

そもそも、このCAMPがスタートするきっかけになったのは、数年前のちようど今頃に鹿児島県のデザイナーの馬頭亮太さんが甬島に10日前後、滞在するということが決まったことでした。

滞在といってもただ休暇として島に滞在するのではなく、しごともしながら家族もいっしょに島にやってきて、しごともプライベートもひっくるめて、島をたのしみたいというコンセプトがそこにはあったのです。

まさかそれがその後、島での新たなしごとの風景を創出するなど大それたプロジェクトに発展するとは思わず、そんなことを聞いてしまった島で山下商店(東シナ海の小さな島ブランド株式会社)という豆腐屋を営む主人の山下賢太とその用務員である小職が、じゃあ何かやりましょうとはじめたのがこの取り組みです。

というとあまりにも無謀な取り組みというイメージが先行してしまうかもしれませんが、その根底には、人口が

【特集】

地域における アートの役割

今回の特集は、アートとデザインの持つ可能性と「しごと」をテーマにしました。そもそもアートとデザインの違いは？と調べてみると百家争鳴じつに多様な意見がでてきます。そのなかで、社会的な役割から見た代表的な説明のひとつに、「アートは問題提起、デザインは問題解決である」というものがあります。

本特集ではあえて厳密な定義は追求せず、この説明に取りあえず準拠して「デザインやアートと「しごと」表」が、地域でどのような可能性を發揮するのかについて、3名の方の実践から考えてみました。

今回ご寄稿いただいた3名のうち、2名はアート、1名はデザインをテーマとして取り上げています。実践している現場、表現方法の違いはありますが、いずれも多様なものを多様なままに表現していくこと、最終的に生まれる「作品(成果)」よりプロセスを重視していることが共通している点です。

複雑化する社会課題を前にしたとき、未来が見えにくいとき、私たちはついつい単純化されたわかりやすい解決策、明快で断定的な言葉に頼る気持ちが生まれます。最近ますますその傾向が強くなっているような気がするのです。一方で、各地でアートイベントが行われているのは、もしかしたらそれにあらがおつとつする気持ちの表れなのかもしれません。

過去にないような複雑な事象に挑み、より良い未来を創ろうとするとき、ひと言で簡単に言い切れないものをさまざまな形で表現し、可視化し、つなぐ試みが必要となります。私たちの社会が持つ複雑さと多様性をひとつの可能性に変えてくれるもの、それがアートやデザインの力なのではないでしょうか。



ロンドンにあるパブ「The Ivy House」



夜遅くまで“しまとりえ”で行われたCAMP



島の課題を見つけるフィールドワーク



突然はじまったgraf・服部さんの屋外レクチャー

1000人ちよつとの高齢化率50%近くの集落の中で、島の風景を新たなカタチで継承していくような事業を次々と進めてきた山下商店が、次なる担い手の育成を見据えた企画でした。

CAMPのプログラムはシンプル。島の課題を自分で見つけて、どうすればよいのかを考えるだけの究極の放置スタイルのCAMP。

参加者のほとんどが昼間からビールを飲んでいるかもしれませんが、これだと思った瞬間から昼夜を問わずディスカッションを重ねて、本気で実現に向けて動き出すという熱意に満ち溢れた場となります。

CAMPから生まれた事業も今回の助成プロジェクトや「Koshiki Stay (http://koshiki-stay.jp/)」など数多くできてきています。

実行に先立つ計画を 考える構想力

今回のテーマとなっているデザインが一般的にイメージする「絵を描くこと」が職能みたいなことではない使われ方をしている、そういうことがいつから定義されたり行為として考えられたりしているのか、せつかくなのでそんなところも少しひも解いてみたいと思います。

おおよそ、デザインの歴史をひっくり返してみると、手工業から工場生産

野のデザインが非常にわかりやすいのですが、リアルな建築を立てる前の行為として、基本的にはクライアントの要望に基づいた(基づかないこともありえます)計画を構想するというところからデザインがスタートします。その後、図面というデザインのアウトプットを経由として、実際の建築が現前するところまでをデザインととらえることができます。

多少、遠回りしてしまいましたが、DESIGN CAMPのデザインが意味するところは、グラフィックデザインであればアウトプットとしてのグラフィックという手段ではなく、「実行に先立つ計画を考える構想力」みたいなところなのかなと考えています。

デザインの拓く 地域の可能性とは？

地域を拓く可能性という点では、デザインだけが重要な要素ではありません。デザインに先立って、地域と呼ばれる場所に住まう人たちの思いがなければ、地域の可能性は拓かれることはありません。

先月、ロンドンを訪れる機会があり、中心部近くの住宅街の中にある「The Ivy House」というパブ(パブリックハウス)にふらりと立ち寄ってきたのですが、ここがロンドンに数多あるパブと違うのは、地域コミュニティにあ

を前提とするような近代へと時代が移行してきた時期に、近代デザインとといったニュアンスの運動とも解釈できるようなムーブメントが英国ではじまったことがどうやらその起こりではないか、とぼんやりわかってきたのです。

前段の近代デザインというムーブメントのまさに渦中にいたのが、ジョン・ラスキンやウィリアム・モリスなどといった人たちでした。興味深いのは、モリスに至ってはデザイナーという肩書きもあつたかもしれませんが、社会改良家などと訳された、なんとも社会を転覆させるような意味合いが含意された魅力的な肩書き。

その背景には、フレデリック・テイラーの「科学的管理法」などに象徴されるような近代が考えた合理化や人間社会を軽視した大型化/大量化/高速化といったキーワードのもとに、時代がズンズンと音を立てて進んでいくようなことに対して、違和感の声を上げて社会に抗うような意味であつたのでムーブメントというカタチが取られたのかとも考えられます。

今という社会起業やソーシャルビジネスを立ち上げていくなどのことにも近い行為だつたのではと考えると何だかおもしろいですね。

起源もそこそこに、今度は職能からアプローチしてみると、建築設計の分る協同組合のような社会的組織が運営しているパブだということです。

まさに地域において老若男女がたのしめるサードプレイスとなつていました。ここは数年前に経営難で立ち行かなくなつてしまつたパブが売却されることになつた時に、そこに住まう人たちが地域にとつて欠かせないパブであり失いたくないと強く思い、立ち上がったからこそ実現した場所なのです。昨今、取り上げられているシビックプライドといつてもいいのかもしれない。

そこに住まう人たちがどうしていきたいのかの思いを基本として、実行の前に少しでもデザイン的な視点に立つてその先のあり方を考えていければ、自然と地域の可能性は拓かれてくるのではないかと思います。

それが「デザインの拓く地域の可能性」だと考えられます。



山下商店のメンバー



「Koshiki DESIGN CAMP」ウェブサイト
http://island-ecs.jp/koshikidesigncamp2017/



多世代共創型演劇ワークショップ(福井市、2017年)発表会の様子。桃太郎や浦島太郎などの昔話をモチーフとしたお芝居をつくり、発表した



多世代共創型演劇ワークショップ(福井市、2017年)練習風景。参加者の緊張をほぐすため、まずは簡単なゲームを通じて交流を深める



アート×地域×大学が 社会に新たな価値を創り出す

蓮行 (劇団衛星/大阪大学)

2016年度 研究助成プログラム助成対象
【助成題目】地域社会における多世代共創型演劇ワークショップによる効果の総合的・定量的評価

上越教育大学での授業風景。演劇的手法(俳優養成のトレーニングに用いられるメソッド)を活用し、授業を活性化させる



アート体験の地域格差

今回私にあえられたテーマは、ある地域(本稿では非首都圏と定義)にアートを投入することで地域の価値が上がるという期待に基づいたものだろう。地域の価値というのは観光振興や農・工生産の増大、住みやすさなど、複雑かつ多様な要素を含んでいます。

しかし、「アートと地域」の掛け合わせには、そもそも大きな困難が存在します。第一に、首都圏と非首都圏の文化資源の大きな格差です。演劇、音楽、ファッションなど芸術全般の資源(ハコや情報、担い手など)が、首都圏に過度に集中している、そして他地域には薄い・ないという現状があります。

第二に、アートには「体験してみなければわからない」という性質があります。体験して良さに気付けば大きな効果をもたらしますが、個人のセンスや好みの影響もあるので、誰もが「素晴らしい」と感じる訳ではありません。アートの「良さがわからない/わかってほしい」と感じる人に、アートの価値を理解していただくのは極めて困難です。

この2つの問題を総合すると、「首都圏以外の文化資源が薄い」うえに「アートは体験しなければわからない」ので、アートに触れる機会の多い首都圏は「需要」をバックにさらに文化資源が集

中し、逆に非首都圏ではより薄くなるという格差の拡大が進みます。

単純科学主義と 単一目的主義

私はこの格差の拡大に対して「大学」が機能するのではないかと考えており、「アートと地域と大学」の関わりを重視して活動しています。全国780大学中、都道府県別では最多が東京都138、次いで大阪が55、最少が島根と佐賀で2となっています。首都圏偏重ではありますが、国立大は各県に一つは設置されており、大学は全都道府県に「ある」インフラです。そして、文科省がCOC+構想(地(知)の拠点大学による地方創生推進事業)を打ち出すなど、地域貢献が求められています。

「体験しなければわからない」という問題の克服には、「体験していなくとも価値を理解してもらおう」という改善の方法があります。つまり、「アートの効果」をデータや理論で「科学的に立証」できれば、自治体は劇場を建てるかもしられませんが、学校は演劇的手法を授業で使うかもしれません。住民も積極的に参加してくれるかもしれません。そんな「理論やデータ」を整えるのが、科学研究の府たる「大学」です。

一方で「科学」の弊害やリスクもあります。科学とは(諸説ありますが)、基本的には「分解・分類」と「因果関係

の解明」です。たしかに科学的方法により人類は多くのものを発明(貨幣や法律制度など含む)し、発展を遂げました。しかし科学には限界がありました。因果関係がはつきりしない現象はあまりにも多いですし、科学史を紐解いても、それまでの学説が覆されるパラダイムシフトは何度も起きてきました。科学を過信してその限界を意識せず、ある現象には一つの原因があるとしてそれを特定しようとする思考——私はこれを「単純科学主義」と呼んでいます——が過剰に定着してしまった。これは科学の弊害です。

単純科学主義は、ある課題には一つの原因があると考え、課題解決のためにその原因の克服を単一の目的とする「単一目的主義」に繋がります。この稿では「単純科学主義」と呼ぶことにし、これを「単一主義」と呼ぶことにします。これを地域活性化に当てはめると、「若者が域外に流出する」、「観光資源がない」、「GDPが低い」など、一つ一つ原因を見つけては単一主義的に解消しようとし、結果的にトータルでは事態を悪化させます。また、「科学的根拠が示されなければ、やらない」ということにも繋がります。そして、これも大事なことです。これまでの大学は、単一主義の「推進役」だった面があります。

アートの話に戻しますと、アートは

※COC: Center of Communityの略称



岡山県立大学での授業風景。学生主体で演劇を創作する授業。演出・出演はもちろん、進行管理、各種調整、照明・音響操作をも学生が行う

多世代共創型演劇ワークショップ(福井市、2017年)発表会当日の準備風景。筆者(手前)もやや緊張した面持ちである





コミュニティにおける「アート」の可能性

門脇 篤 (特定非営利活動法人 地球対話ラボ)

2017年度 国際助成プログラム助成対象
 [助成題目] コミュニティアートが被災地ツーリズムの新局面を提示する
 日本とインドネシア・アチエの協働プロジェクト



アチエ・ランプロ村での「仙台雑煮」づくり

東北被災地とインドネシア・アチエを結ぶプロジェクト

トヨタ財団の助成金を得て、同じ震災被災地としてインドネシア・アチエと東北とを結ぶアート・プロジェクトを2017年から行っている(主催…特定非営利活動法人地球対話ラボ)。ここでは日本、インドネシア双方から、自覚的にアート活動を行う人だけでなく、無自覚におもしろいことをやっている人の行為も「作品」として取り上げている(たとえば、インドネシアにある日本軍の記念碑探しを趣味にしているアチエの40代男性が撮った記念写真と詩、将来自分の店を持ちたいと料理を学ぶアチエの大学生による架空のレストラン、東北の復興住宅で自分の半生を聞かせる88歳の女性やエアコンが何より好きだという8歳の少年と作ったラップのビデオなど)。むしろ私としては今後それを企画の中心にしてはどうかとすら思っている。

それがアートか?と問われれば、正直、今の私には曖昧な答えしかできない。「アートかどうかなんて、どうでもいいことじゃないですか?」と逆に聞いてしまいたい。しかしアート・プロジェクトと銘打って、そこに出品作品としてクレジットしているのだから、私は「アート」としてそれを世に問いたいのだろうし、実際もう、そう



多世代共創型演劇ワークショップ(京都市、2017年)発表会の様子。京都市内のデイサービスセンターに子どもから高齢者までの多世代が集まり、創作活動に取り組んだ。左はカツラや花飾りを身につけ、ノリノリで役を演じる参加者

単単主義とは正反対に「複雑なものを複雑なまま」表現するものです。現代の科学では解決できない事案にアートという「説明のつかないもの」を投入することで、新しい効果が生まれるのではないかと、というのが私の仮説であり、既に各地での実践において、成果が示されつつあります。

アートと地域の掛け算に 大学を絡める

私たちのプロジェクト「地域社会における多世代共創型演劇ワークショップ」による効果の総合的・定量的評価(トヨタ財団助成)は、「地域で多世代が参加する演劇ワークショップを実施すると、『何かいいこと』があるのではないかと?」という漠然とした期待を起点としています。既に京都と福井で社会実験をしましたが、参加した子どもからは「楽しかった」、お年寄りからは「子どもや若いひとと交流できることが、まず嬉しい」、介護職員からは「利用者さんのあんな表情は初めて」など、さまざまな声をいただきました。まず「実践」として面白い内容になったと自負しています。

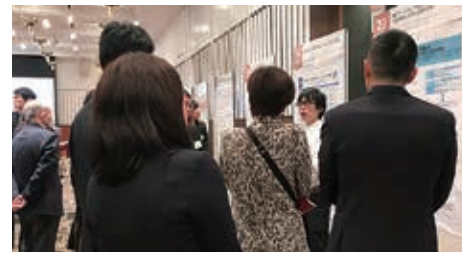
「当事者だから、そう思うだけだろう」という声が聞こえそうですが、全くその通りです。しかし、今回のプロジェクトでは「実践者の思い込み」を超えた客観性を単単主義に陥ることなく示す

ために、各地の大学から招いた医学者・経済学者・心理学者など多様な研究者と、各地で独自の活動を続ける実践者でチームを構成し、研究に当たっています。まずは①子どもの心理的発達度、②介護従事者の介護負担、③高齢者の健康状態、④当該地域のソーシャルキャピタル蓄積度の4観点に着目しています。各々の専門性から異なる知見を持ち寄り、議論を重ねることで、新たな知見や観点も生まれています。

言わば、地域に存在する複雑な課題を複雑なまま扱い、複数の目的を持って取り組む、「重複主義」のスタンスです。かつては単単主義の推進役であった大学ですが、「アートを地域に投入すること」の効果も「重複主義」的に大きくできるのも、また大学なのです。大学の研究力・教育力・ブランド力・動員力を活用して、孤立しがちな芸術家を、地域でうまく「機能」させられると考えています。

皆さんにも、各地の大学へのさまざまなアクセス、および大学から地域へのさまざまなアウトリーチを促すようにしていただきたいと思います。

国立大はもちろん私大も相当な額の血税が投入されていますので、大学は真の意味で社会の役に立たなければいけません。アートと地域の掛け算に大学を絡めることで、その可能性はさらに大きくなるのです。



公益財団法人ひと・健康・未来研究財団 2017年度助成研究発表会の様子。演劇ワークショップの効果が多様な視点から検討するため、研究活動・成果発表にも積極的に取り組んでいる

多世代共創型演劇ワークショップ(京都市、2017年)練習風景。小学生の参加者が、おじいちゃん・おばあちゃんの肩もみをする場面も





88歳が自身の半生を歌うラップ映像(アチエ津波博物館)



被災した自由の女神像のもとで行った夏フェス「石巻メガフェス」



アチエと東北の沿岸を自転車で走る「アチエと東北200キロサイクリング」



仙台の復興住宅での「おしろこを食べる会」

してしまっている。
ではなぜ私はそうしたことを「アート」と呼んでいるのか。そこにどんな可能性があるというのか。

「アート」という言葉を使う理由

私はいろいろな人たちといっしょに、仙台の復興住宅で毎月、おしろこを食べる会を開いている。全く主導的な立場にはなく、むしろ復興住宅に住むお母さんたちに毎回いろいろなお話を教えてもらっている「料理ひとつできかないダメなおやじ」だ。そこで私は「ヒサイシャ」と呼ばれるお母さんたちの、あの津波でも流されることのない、あつた文化的蓄積を毎回のよう目当たりにしている。同じことをアチエでも行ったが、状況はほとんど変わらない。

2004年のスマトラ島沖地震による津波で二階に打ち上げられた船が震災遺構として保存されているランプロ村では、まるで仙台でのそれそのままにお母さんたちが手際よく「仙台雑煮」を作り、人々を笑わせ、もてなしていた。津波で家族を亡くし、何もかもが失われたというこの港町に戻り、ここでとれるカツオを使って鰹節屋を立ち上げ、みんなで作って売っている。「アチエ風仙台雑煮」の出汁はその鰹節でとったものだ。

あつて、それをそう呼んでいるのだと言いたくなる。それはそれを許す人々の存在があつて成立しているという面が大きい。

表現は、それがどう受け止められたかによって大きくその価値や意味が変わる。「アート」はそんな相互の協働による場なのだと思う。それを受け止め、投げ返し、愛でる余裕や豊かさがあることや、賛同できるかどうかを別としても、それをかけがえのないものと認識させる何かがあるかどうか、その根底には必要だ。

わけても私は誰にでもできること、どこにでもあることが好みで、特定の人にはできないこと、技術が高いことや知識が豊富なことには、多少の敬意は払っても、全くといっていいほど興味がない。どんなものも受け手しだいで価値が生まれると思うし、それを証明したいとなぜか強く望んでしまう。

常に逸脱していくかもしれない可能性をもった存在

それはいつたいたいということなのか。私は「アーティスト」になりたいのか。あるいは「アート」というちよつとかつこよさげな附加価値がほしいのか。自分がやっていることは「どこか違う」と言いたいのか。

ただその「どこか違う」というのは、

おしろこのほか、アチエと東北の沿岸を自転車で走ったり、石巻の被災した自由の女神の前で夏フェスをしたり、知的な障がいのある女の子たちとアイドルグループを立ち上げたり、ホームレスや失語症の人とYouTubeで流す番組を作ったりしてきた。それらは単に「会食」や「サイクリング」であり、「フェス」や「アイドル活動」、「ユーチューバー」と呼ばれるべきものなかもしれない。しかし私はそれを説明するのに「アート」という言葉を使ってしまう。なぜそんな必要があるのか。

おもしろいことはすでにして日々、いたるところで行われている。それをおもしろいことなどと確認する必要もない。だからおもしろいことを日々行っている人がそれを必要としているのではなく、私がそれを必要としているのだらう。あたかもそうしたことを「可視化」していく必要が社会にとって利益になるのだとでも言うかのよう

かけがえのないものと認識させる何か

「アートなるもの」がまずあつて、それを現出させようとしているわけでは全くない。とはいえ何かそう呼ばれる、呼ぶに値する、呼ぶしかないものが

別にポジティブな意味に限らない。いつでもそのコミュニティから自覚的無自覚的に浮いてしまっているということ、その距離が「アート」の正体ではないかと思う。常にそのものからどこか外れていたたい。いつも特定のコミュニティや「言語」からずれていたたい。それはそれらコミュニティを否定しているのではなく(むしろそれが存在することが前提で「アート」は成立しているのだから)、常にそこから距離があるという点において成立するようなあり方を、私は「アート」と呼びたいのだと思う。

それがそこにとどまることなく、常に逸脱していくかもしれない可能性をもった存在であるということ。それゆえにこそ、その中であつては生まれてこないようなものを時として生み出し、気づかないようなことに気づいてしまうような役割。それが「アート」の可能性であり、私を魅了しつづけている理由だと思う。

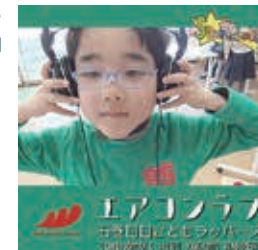


アチエの日本軍記念碑を集めたネディアル氏の展示(アチエ津波博物館)



失語症の人とつくるYouTube番組「失語症?チャンネル」

石巻の8歳の少年と作ったラップ「エアコンLOVE」ジャケット



社会のなかに大らかな空間と時間をつくる

NPOの本来の役割とは何か。成果の評価やソーシャル・インパクトの重要性とは別に、「市民」であればこそできる活動があるのではないか。連載3回目は多様性と「こだわり」を軸に、特定認定NPO法人アカツキ代表理事の永田賢介さんとの熱い対話をお届けします。



Yamaoka Yoshinori

山岡義典

1977年にトヨタ財団へ入団し、15年にわたりプログラムオフィサーとして活躍。現在は特定非営利活動法人市民社会創造ファンド運営委員長、助成財団センター理事長、日本NPOセンター顧問などを務める

た、少数のエリートが大衆を導くのではなく、誰でも自らの手で何かをつくっていく力があり、それが実現する社会を目指すという考えや活動にとても感銘を受け、勇気付けられています。この前の本誌で、山岡さんはいわゆる成果的評価、そのための手法という点に対して少し危うさを感じられている、それは行政が使うときには有用かもしれないけど、市民活動のためのツールではないとおっしゃっていたのが印象的でした。

山岡 成果の評価やソーシャルインパクトもいけれど、そればかりではなく我々は新しい価値の創造というところをもっと大切にしたらどうかとお話しました。価値の創造は行政ではなかなか難しい。その点民間のほうが有利。企業では儲からないことはやりに

くいかもしれないけど、新しい考え方の転換、発想みたいなものが次々に生まれるような空間が社会のどこかに必要です。そういうときにNPO的なもの、社会企業でもいいのですが、当面のリターンとは無関係に何かができるか、面白いからやってみようというんです。今は、誰もが役に立たないといけないのではと考えすぎてしまっている。以前には、面白いからやっ

みたらどうだろうという気持ちがあつた。役に立つかどうかかわからないことのなかに新しい価値の創造がある、と思っていた。永田 ロジックモデルによる成果定義の危うさは、予想されていなかった別のインパクト因子（枝）を無視してしまうことだと感じます。本当は、ロジックを描いたプレイヤー以外の多くの人々が行動したことによってインベションが起きたかもしれないのに、そのことが意識されないことによって、成果が独り占めされたり、寧ろ再現性が失われてしまふことにつながる。特にNPO法人であれば、総会の重要な意思決定に関わる正会員が最低10名必要とされています。これはある意味、その合意形成の面倒くさを前向きに引き受けることが創造性につながるということ。誰か一握りの人が決めた「良い社会」という定義の外にはじかれにくいための仕組みではないかという気がします。

山岡 必要なのは多様性なんです。ひとつの組織の中でも、10人なら10人がそれぞれ共感するけどちよつとずつ違う部分があるっていうほうが、ある種の多様性を担保できる。同時に一つひとつのNPOがまったく違う価値観であつてもいいというか、NPO法をつくったときは、そういうことをすごく重視したわけです。評価論を突き詰めていくと多様性を維持できなくなる可能性もあるという意味で、どういう風に我々が多様性を評価する仕組みをつくるか。あるものを美味しいと評価しても、美味しいと思わない人もいるわけで、その人がこれを美味しいと言わ

役に立たないことのなかに新しい価値の創造がある

山岡 今回も前2回に引き続き、市民社会というテーマをベースにしてお話できればと考えています。

永田 山岡さんたちが先導してきてくださっ

ないといけないのかと気をつかつて萎縮されても困る。

永田 最近テレビなどで日本の中小企業が頑張っているという番組がありますが、そこで語られているのも、最初から多数派のわかりやすい評価や短期的な利益回収をねらって商品をつくったというストーリーではなくて、むしろ少数派向けとかマニアックなもの、自分が欲しくてつくっていたものが、あるとき突然売れはじめたみたいなことですよ。

「こだわれどもとられず、いきいきとした活動を」

山岡 以前から僕は、NPOの人間はこだわらないといけない、でもとられてはいけないと言ってきました。「こだわれどもとられず」というのを信条にしてきた。行政からの委託や補助だけで事業を回して、団体のこだわりがなくなってきたところが増えてくる気がするんです。こだわりもないままにとらわれている人も多いのではないでしょう



◎ 永田賢介(ながた・けんすけ)
特例認定 NPO 法人アカツキ代表理事、北九州市立大学非常勤講師。福岡でファンドレイジング・NPO 法人事務・内部コミュニケーションを中心にした NPO の伴走型コンサルティングを行う

か。別の言い方をすれば、お互いに非難しあつても否定はしない。これが市民社会を支えるNPOの倫理的態度だろうと思つています。永田 私の所属する団体では、理事全員でロジックモデルを作りました。資金調達のプレゼンのためではなく、自分たちが大事にしていることの再確認のため、ファンドレイジングのコンサルティングで大切なのは「資金調達額」よりも「支援者数」という結論に至りました。通常のファンドレイジング業界では、集める金額が大きければ大きいほど、早いほど、効率が良いほど望ましいという価値観があります。もちろん、それはそれで否定する気はないのですが、私たちは寄付者を主体に社会参画を考えるため、30万円×1人より3000円×100人の方が必要だから、ということ。この判断基準に合意してからは、理事会の意思決定やクライアントへの説明がスムーズになりましたね。

山岡 ものの方向を変えろということですね。「人間万事塞翁が馬」という中国のことわざがあります。不幸は幸になり、幸は不幸にもなるわけで、何がいかというのはその時によつて変わるわけです。だから評価といつても、ある時点のある側面でしかない。そんな価値の相対性みたいなことって、誰でもある程度は経験的にわかっているはずなんですよ。けどね。

永田 たとえば、企業と協働できない、行政も税金をつかわない、1円も流通してない。けれど地域のおばちゃんたちがすごく楽しく活動して子どもたちものびのび遊んでい

る、そのなかで子どもたちの自尊心や社会性が育まれたりする場には意義があると思えます。市民活動の評価をする場合は、誰が評価者なのか・何を基準にするのか・誰に対する説明責任かを明らかにしなければ、弱者や不幸を喧伝することで資金調達を行うことを促進しかねず、危険です。

山岡 今おっしゃったような世界は、「問題解決」をしないといけないというだけの発想からは出てこないですよ。特定の案件の問題解決につながらなくても、何の役にも立たないかもしれないけど、いきいきと活動するっていうのがNPOの命。社会のなかにそんな大らかな空間と時間をつくり出すのがNPOの大事な役割だと私は思っています。





2018年度事業計画

トヨタ財団の本年度「事業計画」が決まりました。その概要をお知らせいたします。

私どもは、昭和49（1974）年の設立以来、生活・自然環境、社会福祉、教育・文化等に関するさまざまな研究や事業に対して助成を行い、そして、助成プログラムの企画立案に際しましては、「先見性」「市民性」「国際性」の3つのキーワードを軸として参りました。

本年度の事業計画の立案に際しましては、これまでの取り組みの理念を踏まえつつ、財団を取り巻く内外の環境が大きく変化していることに対応し、中長期的視点から、より社会的意義の大きい領域に重点化することを旨といたしました。

具体的には、メインとなる3助成プログラム（国内・研究・国際）につきまして、その基本テーマは昨年度のものも踏襲することとし、助成金予算についてプログラム間の強弱をつけ、各プログラムの中で重点化テーマ（特定課題）の発掘・試行に取り組むことにいたしました。ご参考までに、助成金の総額としては昨年度と同額の3億6500万円となります。

支援する。また、そこでの知見やネットワークを、公募プログラムのより良い運営（各地の中間支援組織との連携による助成プロジェクトの支援や、公募プログラム趣旨の認知等）に活用する。
3期目となるトヨタNPOカレッジ「カイケツ」は、開催地をNPOの数も多くニーズの高い東京に変更することで、波及効果を高める。この他に、これまでの助成の枠組みでは支援が難しいテーマや、より深掘りが必要と認識したテーマについて支援をすべく、新たに「特定課題」を設置する。例えば、これまで助成してきた特定のテーマに取り組み複数の団体が連携することで全国的な社会課題の解決を目指すような取り組みへの支援などを想定する。テーマは、SDGsの理念を参照するなど広い視野で検討し、2018年9月理事会にて決定する。

●募集概要

〈一般助成〉

「テーマ」

「未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティ——地域に開かれた仕事づくりを通じて——」

「助成力テコリー」

しらべる助成、そだてる助成

「募集時期」

2018年9月1日～9月30日

各プログラムの詳細につきましては後述いたしますが、国内助成プログラムにつきましては、全体の助成金規模を1億3000万円に拡充し、NPOによる地域の活性化、地域コミュニティの再生を重点対象として、地域の若手リーダーの育成、新たな生業づくりに焦点を当て、自治体や地域企業との連携をも視野に入れた、持続可能な事業の創出を目指します。

研究助成プログラムにつきましては、助成金予算内の4000万円を特定課題に振り向け、AI革命の進展など先端技術の急速な発展によってもたらされた大きな社会課題について、年度前半の半年間をかけた外部有識者からのヒアリングや研究会の開催により深掘りを行うことで、その助成テーマを決定することにいたします。

国際助成プログラムにつきましては、来年度の新プログラム開発を目指して、これまで過去4年間の総合的なプログラム評価を行うことに注力いたしますので、従来テーマで募集する本年度の助成金の規模は7000万円といたします。

「助成予定金額」

総額1億円+1000万円

しらべる助成…上限額100万円程度/件
そだてる助成…上限額設定なし

※助成事業の成果をより高めるための基盤強化費（研修参加費、旅費、専門家謝金等）を必要に応じて上乗せして助成する。

「助成期間」

しらべる助成…2019年4月1日から最長1年間
そだてる助成…2019年4月1日から2年間

〈発信・提言助成〉

過去の助成成果を広く発信し、社会の仕組みや価値観を変えることを目的として実施するネットワーク形成・政策提言・社会提案への支援。

「助成予定金額」

総額1000万円

〈特定課題〉

「内容」

これまでの助成の枠組みでは支援が難しいテーマや、より深掘りが必要と認識したテーマについて、新たに特定課題を設置し、助成を行う。

「助成予定金額」

総額2000万円

「助成期間」

複数年度

国内助成プログラム

●2018年度の考え方

国内助成プログラムの基本的な枠組みは、2017年度を踏襲する。

「そだてる助成」については、助成対象プロジェクトの目標実現の確度を上げるべく、本年度より、基盤強化費1000万円（伴走者・専門家への相談、研修参加、視察、ステークホルダーとの関係構築に伴い必要となる費用などの追加的な費用）を必要に応じて上乗せして助成する。

「しらべる助成」については、狙いと重要性の認知が不十分と考えるため、本年度は「しらべる助成」を中心とした公募説明会や応募相談に積極的に取り組む。

また、プロジェクトを通じて創造された「価値」や「しくみ」を社会に広めることを目的とした「発信・提言助成」の枠組みを拡充（500万円を1000万円に増額）し、積極的に対象となるプロジェクトを発掘する。

非営利セクター全体の基盤強化に資する取り組みについては、2017年度に引き続き、イニシアティブプログラムを通じて

研究助成プログラム

●2018年度の考え方

2017年度の助成テーマを継続すると同時に、時代の変化による大きな社会的課題に対応するため「特定課題」を新設し、一般助成と区別して助成を実施する。特定課題については、時限を2年間、もしくは3年間として、終了後、よりよい助成を実施するために、事業のとりまとめ及び見直しを実施する。

一般助成では、引き続き、世界を俯瞰し、未来を見通す広い視野において、これからの社会が対応を迫られる困難な課題に向き合うための基本的な考え方や方法論を探究する、学際的・横断的なプロジェクトを支援する。過去の助成の成果、他の研究支援機関の動向などを踏まえ、前年度までの（A）共同研究助成と（B）個人研究助成の助成枠を統合し、若手研究者支援を焦点とする。その上で、従来の研究会・報告会（ワークショップ）の拡充など、助成対象者へのフォローを強化する方法を検討する。

特定課題では、AI革命の進展など、先端技術の急速な発展によってもたらされた大きな社会的課題に取り組むプロジェクトへの助成を実施する。外部有識者からのヒアリングや研究会の開催を通じ、助成テーマの深掘りを進め、具体的な事業計画を確定させたうえで助成を実施する。

●募集概要
〈一般助成〉

「社会の新たな価値の創出をめざして」
[テーマ]

[募集時期]
2018年6月4日～8月3日

[助成予定金額]
総額6000万円[上限額800万円/件]

[助成期間]
2019年5月1日から2年間

[応募要件]
助成開始時45歳以下

〈特定課題〉
[テーマ]

「先端技術と共創する新たな人間社会」(仮)
[募集時期]
2018年10月15日～11月2日(予定)

[助成予定金額]
総額4000万円[上限額3000万円/件](2件程度を想定)

[助成期間]
2019年5月1日から2年間もしくは3年間

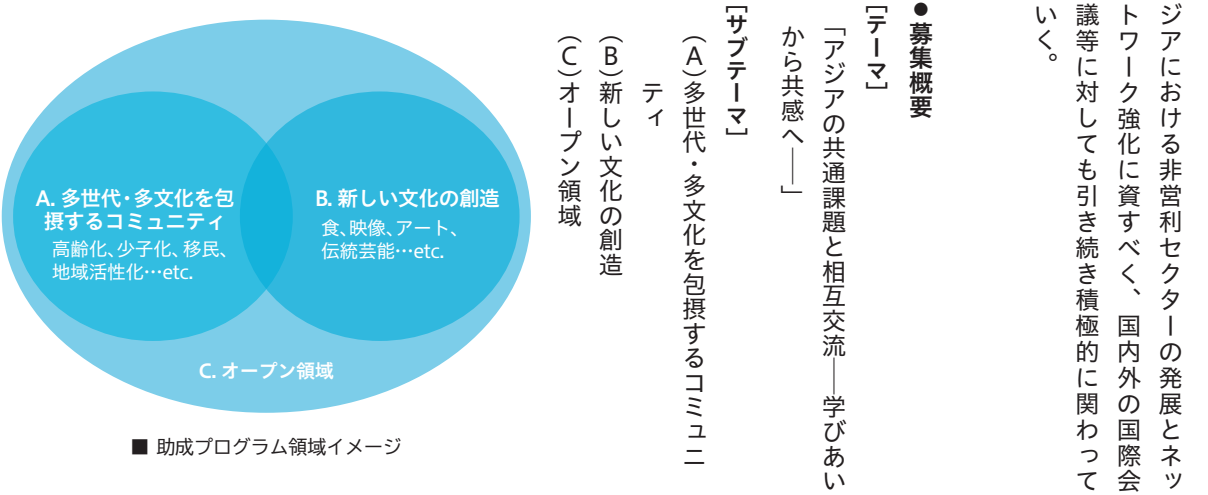
*詳細は10月以降ウェブサイト等にて公開予定です。

国際助成プログラム

●2018年度の考え方
助成プログラムとしては、2017年度の基本テーマと趣旨を継続する。具体的には、日本を含む東アジアと東南アジアの共通課題に対する「2国以上の地域実践者による国を越えた現場交流・課題解決」への助成を行う。助成領域も(A)多世代・多文化を包摂する地域コミュニティ、(B)新しい文化の創造、(C)オープン領域の3領域を継続するが、助成金額は従来の1億円から7000万円に縮小する。一方で、過去2年間のプログラム運営で知見として得られた「国際性」「越境性」「双方向性」「先見性」という4つの視点を募集要項内でも明示することで、応募者への本テーマの浸透とプログラムとしての深化を図る。

加えて、本年度は、過去4年間の国際助成プログラムについて、選考委員等の外部有識者及びPOによる総合的なプログラム評価を実施する。評価作業は2018年12月末までに終え、2019年度の新プログラム開発に資するものとする。また、その結果は日本語と英語で報告書としてまとめ公開する。

更に、各国の活動を通じて互いに学びあい、自国の解決策を見出ししていくという国際助成プログラムの狙いを表現するために、報告会・シンポジウム等のイベントを通じて人的・知的な交流を行うことや、ア



[対象国]
東アジア・東南アジアの国や地域
・東アジア：中国、香港、マカオ、台湾、韓国、

シアにおける非営利セクターの発展とネットワーク強化に資すべく、国内外の国際会議等に対しても引き続き積極的に関わっていく。

●募集概要

[テーマ]
「アジアの共通課題と相互交流—学びあいから共感へ—」

[サブテーマ]
(A)多世代・多文化を包摂するコミュニティ
(B)新しい文化の創造
(C)オープン領域

モンゴル、日本

・東南アジア：ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム

[対象プロジェクト]

対象国の2国以上における、各サブテーマについてのレビュー及び提言や作品の制作

[募集時期]
2018年4月2日～6月15日

[助成予定金額]
総額7000万円

[助成期間]
2018年11月1日から1年間もしくは2年間

社会コミュニケーションプログラム

(非公募)

●2018年度の考え方
全プログラムを対象に、助成プロジェクトの成果や手法などをインパクトのある形で社会に発信・普及させることを目的とする。具体的には、モニタリング(中間・最終段階)などを通して候補となるプロジェクトを選定し、助成対象者とPOが連携して効果的な社会への発信を図る。
書籍の出版のみならず、映像媒体(映画・

イニシアティブプログラム

(非公募)

ビデオ・DVD・漫画など)、デジタル媒体(ホームページ・メールマガジンなど)やシンポジウム、ワークショップ、メディアの活用など多様な方法を通じての社会発信を対象とする。

[助成予定金額]
総額2000万円

●2018年度の考え方

NPOの基盤強化など、非営利セクターの発展に資するプロジェクトに対する助成を行うとともに、他組織との共同助成、民間財団として支援の意義が大きいと考えるプロジェクトなど、本プログラムの本来の目的である、将来の新しいプログラムの開発に資するためのプロジェクトを積極的に発掘していくこととしたい。

[助成予定金額]
総額4500万円

公募情報 2018年度 国際助成プログラム

[テーマ]
アジアの共通課題と相互交流—学びあいから共感へ—

[募集期間]
2018年4月2日(月)～6月15日(金)

国際助成プログラムでは2018年度の公募を開始いたしました。募集要項等のプログラムの詳細、応募方法については当財団ウェブサイトをご覧ください。皆さまからのご応募をお待ちしております。



たくましく、
心あたたまる

活動の継続を

公益財団法人 トヨタ財団名誉会長
豊田達郎

トヨタ財団の第2代会長として1998年から2011年までの13年間の長きにわたり当財団の代表を務められた豊田達郎名誉会長が、2017年12月30日88歳で逝去されました。

豊田名誉会長は、1995年に病氣療養のためトヨタ自動車の社長を退かれた後、同社副会長、相談役を務められる傍ら、トヨタ財団の会長として生活・自然環境、社会福祉、教育・文化、国際交流・協力等に関する研究及び事業に対する助成事業を精力的に推し進められました。

ここでは追悼の意を込め、本誌4号(2010年9月14日発行)に掲載した豊田名誉会長のインタビューを再掲いたします。財団設立時の理念をふまえ、今後の財団に託した名誉会長の想いが語られています。

トヨタ財団の設立にこめられた、トヨタ創業者たちの想いについてお聞かせいただけますか。

トヨタグループの創始者である豊田佐吉翁の考えをまとめた「豊田綱領」というものがあります。佐吉翁6回忌に息子の豊田喜一郎らが起草したのですが、グループ各社の社是として今日に至るまで受け継がれています。そのなかに、他者を敬い、社会への恩に報いるという感謝の気持ちの大切さが説かれています。私自身もトヨタ自動車の経営者の一人として、また、トヨタ財団の会長として、この綱領の精神(こころ)を大切にしていかなければならないと思っています。

また、トヨタ自動車創業者である豊田喜一郎は、日本における自動車産業を自らの手で興すことで社会に貢献することをめざしました。基幹産業としての責任感を常に持ち、利潤追求だけではなく、企業をより豊かな社会を築く礎としていくことが経営の基本理念だとの考え

からです。このように、創業者たちの想いがトヨタの社会貢献の根底に流れているのです。その想いが前面に現れ出たのがトヨタ財団といえるでしょう。

当財団の他にもその意思が形になったものとして、同時期に設立された豊田工業大学があります。大学では教育によるものづくりの大切さを継承できるひとづくりを、トヨタ財団では助成活動による、よりよい社会づくりをめざしたのです。

トヨタ財団を設立された豊田英一最高顧問が、トヨタ財団に託されたのはどのようなことなのか、会長のお考えを教えてください。

豊田英二は、トヨタ財団の設立に際して「企業が今日あるのは、社会の恩恵を受けてであり、そのお返しとして広く公共のお役に立つことをしたいと考えるのは、ごく当然のことであり、財団の設立は、その一つの方法である」と言っています。つまり、車で得た利益を社会に還元する必要があると考えて財団を設立したのです。

また、設立当初より、企業の利潤追求とは独立した財団を作ることを考えていたようです。豊田英二は、当時東京工業大学社会工学科教授であった林雄二郎先生にトヨタ財団の骨格づくりを一任しています。設立当初、暗中模索するしかない状況のなかで、林先生にはずいぶんご尽力いただいたと聞いています。トヨタ財団では、日本ではじめてプログラムオフィサーという助成業務の専門家を置く制度を取り入れましたが、これも林先生が考えたことで、トヨタ財団の基礎を築いてくださった林先生には、たいへん感謝しています。

私は豊田英二、林雄二郎先生が築いたそんな財団のよき面を、引き続き大事にしていきたいと考えています。一特定企業の利益のためではなく、トヨタ財団は社会のために存在する財団である、という認識がなによりも大事です。

設立から現在に至るまでのトヨタ財団の活動を振り返られて、いかがですか。

いろいろありますが、特に設立間もない時期からアジアへの助成を行っていたことは、有意義な活動だと思えます。当時は、多大なご苦労もあったようですが、東南アジアへの助成では、亡くなられた石井米雄先生(京都大学名誉教授)がご尽力くださいました。それらの努

力が日本と東南アジア諸国との文化的な交流の促進につながったことは、たいへん大きな成果だったのではないのでしょうか。

それ以外にも、国内外において設立から現在に至る36年間で7000件以上の助成を行うことができました。これらの方々に、改めて応援の言葉とお礼を申し上げたいと思います。また、現在においても毎年多くの応募をいただいております。気持ちの引き締まる思いがしています。

今後の財団の活動において、どのようなことが重要なポイントになるとお考えですか。

三つのことを考えています。一つは、「継続は力なり」です。アメリカの財団などに比べるとまだまだ規模が小さいですが、身体力に依じたことを、まじめに着実にやり続けていくことが大切です。

二つ目は、現場を大切にすることです。トヨタ財団もプログラムオフィサーが現場の人とともに考え、よいプログラムを作ってきました。今後も現場の方々の声をよく聞いて、現場の方々とともに、自信をもって活動をしてほしいという気持ちを強く抱いています。

三つ目は、他の組織や人との連携です。今後も助成対象となる方々、他の民間財団など社会のさまざまな組織や人びとの連携を深めて、より活動の幅を広げ、質を高めていくことが大切だと思っています。

最後に、これからの財団活動に期待することをお話ください。

これまでは、アジアへの助成活動を多く行ってきました。とてもよい成果をあげていると思います。しかし今は、環境問題をはじめ、文化や経済における社会の問題・課題は地球規模でひろがっている時代です。これからは、さらにより広い地域を視野に入れて助成活動を展開すべきだと考えています。

それと、この財団が活動を通して、一企業が接するお客様をはじめとしたステークホルダーとはまた違った社会の方々や接することができるのは、とても貴重なことです。そのような方々と財団活動を通じて接するなかで、現代社会の課題を冷静に受け止め、よりよい未来を築くために、たくましく、そして心あたたまる活動を継続していくことが、トヨタ財団の重要な使命であり、役割だと思っています。

「里山」とはどんな森か、というのは定義が難しいですが、私自身は、人間の活動圏に比較的近い森林の一部が「里山」なのであろうと漠然と捉えています。かつて里山からは、材木、炊事用の薪、季節の山菜など多種多様な産物が利用されていました。

しかし、里山を生活の糧として利用する必要がほぼなくなった今日、里山と人間の関わりは希薄になっています。さらに、いつの間にか広がっている「自然はありのままが良い」という風潮が里山にも普及し、里山は人間による管理の対象から外れているように感じます。たしかに、日本の森林は、人の手が入らなくても自立した生態系が成立しており、寿命の尽きた木は倒れ、新たな芽生えが空いたスペースを埋め、森林が森林として維持されています。その観点に立つと、「里山」は放置しておいても長期的には自立可能なものかもしれません。

一方で、森林資源の利用や森林関連災害との奮闘の歴史は古く、文化・伝統としての森林管理が日本にはあります。そして、身近な「里山」はそのような森林と人との関わり方の文化・伝統を引き継ぐ場所にもなりうるのではないかと考えています。森林研究に携わる身として、その可能性を模索し発信したいと考えていた折に、今回の研究助成は願ってもない好機でした。

本 研究で試してみたかったことは、大きく二つありました。一つは、里山

研究テーマを設定するにあたっては、地域住民の方々と児童たちにも受け入れられるテーマで、なおかつ最終的には学会や論文として発表可能なレベルの成果が期待できるものを、と意気込んだものの、なかなか見つからず四苦八苦しました。結果として、テーマ発掘の糸口は、私自身の子どもの頃の里山体験にありました。里山で遊びまわっていた当時から好きだったシュンランを上牧里山にも見つけ、シュンランは健全な里山のバロメーターかもしれない、と思いつき、森林研究を志した頃のようにわくわくしながら研究計画を練りました。

い ん ざ 研究を開始してみると、個人が主体となる研究では味わえない多くのことに直面しました。一年目、児童には、総合学習の時間を使って研究協力をしてもらいました。担任の先生方も児童も初めての取り組みだったので、何をすることも手探り状態でしたが、調査枠の設置、植物の種同定、シュンランの個体数などをステップごとに進めることで、人数を生かした調査が小学生でも可能なことを実感しました。一年目のデータは、2018年の森林学会で発表でき、今後論文としてもまとまりそうです。ただ、児童の能力を信じ切れず、取ってくれたデータを私自身で再度取り直すなど、二度手間、三度手間になってしまったこともあったのは、ここだけの話です。

二年目は、一年目の結果から生じたシュンランと里山に関する疑問に対して、5つ

「私」のまなざし 21

シュンランの咲く里山 — これからの時代の里山管理 —

文・写真 ● 黒河内寛之
東京大学大学院農学生命科学研究科



シュンラン



調査対象区域



上牧里山づくりの参加



小学生の参加

管理を実践する住民団体との協働です。里山管理は、各地で地域住民やNPOなどの主導の下、手探りで経験則に基づき実践されているのが現状です。里山管理への意欲が高い住民らの活動は、時として自己完結で終わってしまうこともあり、非常にもったいないと感じていました。科学の強みの一つは、普遍的なデータを共有し、後世に残せることだと思います。これまで、伝統や慣習でしかなかった管理の実態を、科学を通じてその効果を明らかにし、論文として残すことができれば、非常に有意義です。実行力のある住民らの活動と科学を融合できるのか、壮大なテーマです。

次に、若い世代との協働です。里山管理は重労働に伴い、時間もかかり、お金もかかります。結果的に、里山管理を実践するのは、一定年齢以上の人になりがちです。しかし、里山を、森林と人との関わり方の文化・伝統を引き継ぐ場所としてとらえた場合、次代を担う若い世代にも里山維持の活動に関わってもらうことが肝要です。今まで研究に取り入れてこられなかった、この点も研究に加えたいと思いました。

幸いにも、前者に関しては長野県伊那市上牧で活動している大野田文吉氏が代表を務める「上牧里山づくり」という地域住民の団体に協力してもらえました。また、後者に関しても、「上牧里山づくり」と関わりがあった長野県伊那市立伊那北小学校の高学年の皆さんと担任の先生からの協力が得

上 牧里山づくり」の皆さんには児童の研究活動のサポート等をお願いしました。私のような若輩の研究テーマに対して献身的に協力していただいたうえ、これも面白いぞ、あれも面白いぞと、里山管理の醍醐味を余すことなく教えていただき、将来の活動テーマになりそうなものもありました。できることは自分たちでやろうと、専門業者に委託すれば楽な重労働にも、果敢に取り組んでくださいました。効率化が全てではなく、協働して里山管理をする際には、想いや情熱といったうまく数値化できない部分も切り捨てられない重要なファクターであることが認識できました。

科学を活かして里山管理を、という私の研究は、これまで出会ってきた皆さんの想いを重ね合わせ、まだまだ続きます。

● 黒河内寛之(東京大学大学院農学生命科学研究科) 2015年度研究助成プログラム助成対象「シュンランの咲く里山」を実現する里山管理技術の開発—シュンラン繁殖生態の解明と高木樹種管理による林内環境改善手法の科学的検討—

*伊那北小学校6年1組の児童たちによる研究報告会が開催されました。詳しくは29ページをご覧ください。

国内助成プログラム【そだてる助成】

代表者氏名	題 目	活動地域
上野 健夫	CSAによる若者の仕事づくり ― 農と暮らしを支える鳴子型 CSA の実践	宮城県
北村 隆幸	関に若者が戻り、住み続けられる地域へ	岐阜県
土井 隆	高校のない長島町で高校生が学ぶ仕組みづくり ― 長島大陸 N センターで行う全国の高中生と事業者の交流促進	鹿児島県
西川 亮	ソーシャルリーダー育成PJ ― 課題解決のムーブメントで社会を変える！	大阪府
遠山 真治	未来のふるさとづくり ― 空き家と棚田を活かし心をつなぐ準村民制度	新潟県
小野寺 真澄	せんまや女子×まち魅力創出 ― 駅前賑わいづくりを通じた担い手育成	岩手県
大澤 直彦	ユニバーサルツーリズム ― カルチャー×ココロ×エコで地域を育てよう	大分県
高田 新一郎	志ごと人養成プロジェクト ― 地域の希望をつなぐ仕事と担い手づくり	山口県

国内助成プログラム【発信・提言助成】

代表者氏名	題 目	活動地域
原田 禎夫	内陸部からの海ごみ発生抑制 ― 地域から始める脱プラスチック社会への挑戦	京都府

研究助成プログラム【共同研究助成】

代表者氏名	題 目	助成期間
野澤 暁子	中世ジャワの死生観を「詠む」 ― 映像ナラティブによる浮彫壁画解釈の質的転換と文化伝承の可能性	2年
竹峰 誠一郎	世界の核実験補償制度の掘り起こしと国際比較調査 ― 「ニュークリア・ジャスティス」に基づく核被害補償の規範を求めて	2年
シャオウェン・バーゼル	米国中西部における国境を超える改革および労働の将来像	1年
マシュー・シュエルカ	持続可能な社会のための教育的価値 ― ブータンにおける「頭」、「手」、「心」および「幸福」のモデルの構築と世界への発信に向けて	2年
マシュー・アシュフォールド	東南アジアにおけるヘイズ危機 ― 隣国間の感情と関係を前向きに構築する道筋としての公共的価値	2年
オリバー・スコット・カリー	道徳の分子 ― 新たな価値はどのように創出されるのか	2年
オアヌ・フィッセル	デジタル農業の発達 ― 「新農業革命」における社会的相互作用および価値の役割に関する研究	2年
尾崎 章彦	福島県における Well-being を高める保健医療体制の追求 ― 福島原発事故からの真の復興を目指して	2年
坂井 志織	慢性の病い経験を捉える新しい概念生成に関する現象学的研究 ― 治癒や管理とは異なる視座の開拓	2年
工藤 栄一郎	地域社会における「地域継続計画(CCP: Community Continuity Planning)」構築のデザイン構想	2年

国内助成・研究助成プログラム プロジェクト一覧 2017

2017年度に採択された国内助成プログラム(しらべる助成16件、そだてる助成10件、発信・提言助成1件)と、研究助成プログラム(共同研究助成18件、個人研究助成13件)のプロジェクト一覧です。

*掲載内容は2018年3月22日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

国内助成プログラム【しらべる助成】

代表者氏名	題 目	活動地域
太田 明広	林道の観光ポテンシャル調査 ― 再び山と共に生きる為の里山資産の読み換え	兵庫県
杉澤 莉子	若者と地域の有力者をつなぐ ― 住民の実態調査を通じたコミュニティづくり	福島県
伊藤 次郎	「声なき声」に支援を届ける ― 新たなアウトリーチ展開のための調査	東京都
中村 正	効果的な市場導入手法の検証 ― 副業を促進し福祉職就労基盤の強化を目指す	京都府
水木 千代美	中学生の適材適所進路ナビ ― 進路情報のプラットフォームをつくる	大阪府
小石 俊一	農家・若者で作る農業の未来 ― 農の伝統・文化を守る担い手育成の道を探る	群馬県
酒井 佑輔	鹿児島の多文化共生基礎調査 ― 在留外国人も共に主体となる地域づくりへ	鹿児島県
中山 郁英	地域をあきらめない生き方 ― 地方と都市を越えた若手人材往還の創出	滋賀県
松居 秀子	靱・暮らしと町並みの研究 ― 自分たちの手で後世につなげる町並み保存	広島県
佐藤 可奈子	中山間地域の農業を変える！ ― 農地とひとの新しいマッチング	新潟県
奥田 順之	ペット産業の社会的責任調査 ― ペットショップの社会的責任評価	岐阜県
松橋 悦治	山業習得・山人養成学校 ― 阿仁の山を最大限活かす技を学び山で生きる	秋田県
廣畑 佐知子	カイ猫をノラ猫にしないために ― 岡山飼い猫実態調査	岡山県
村松 ももこ	空き家活用でつくる、持続可能な子育てママの活躍の場	宮城県
高村 和明	街に和を描くプロボノ育成 ― 団地再生のエリアマネジメントの現場から	東京都
丹羽 健司	森の棚おろし ― 地域優良材フェアトレード社会実験	愛知県

国内助成プログラム【そだてる助成】

代表者氏名	題 目	活動地域
安藤 希代子	障害児の保護者を支える ― 子育て環境に資する支え手育成と居場所作り	岡山県
山下 丈太	和東空き家再生プロジェクト ― 仕事も暮らしも楽しくなる援農ハウス	京都府

研究助成プログラム【共同研究助成】

代表者氏名	題 目	助成期間
高田 知紀	南海トラフ巨大地震の防災減災に向けた伝統的神社空間のもつ価値構造の再構築	2年
瀬戸山 陽子	障害学生のエンパワメントを促す当事者の「語りの映像アーカイブ」の構築	2年
ギエム・ティ・フオン・トゥイエン	ベトナムにおける土地使用権に関するボトムアップ型アプローチ — 力強い中小企業の育成に向けて	2年
三島 美佐子	活用文化財としての歴史的木製什器の在野保存 — 新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究	2年
深山 直子	気象災害連鎖を生き抜くオセアニア環礁社会の戦略 — アトール・レジリエンス解明に挑む	2年
前川 佳遠理	「太平洋戦争で生まれた子供たち」 — 日本軍兵士・民間人の移動と東南アジア・東アジアにおける日本の軍事占領に起因した日系の子に関する基礎的研究	2年
平井 伸治	メキシコ東北地方における日本人移民の歴史の調査・保存と継承を目指すコミュニティ参加型プロジェクト	2年
渡辺 登喜子	エボラ感染者が社会的弱者にならない社会システムの構築	2年

研究助成プログラム【個人研究助成】

代表者氏名	題 目	助成期間
古川 雄一	受容とイノベーション — 新しいもの好きな人が多い社会は、イノベーションに成功するのか？	2年
パワン・ディーブ・シン	インドの生体認証プロジェクト — 情報化時代の社会におけるデータプライバシーと新しい社会的価値	1年
高橋 佑磨	集団内の個性や多様性の機能 — モデル生物と生態ビッグデータを用いた検証	2年
ニコール・クラート	デマゴグ政治家と扇動される哀れな人びとの社会からの脱却 — 参加型社会の実現に向けたポピュリズムの話法の転換	2年
松森 奈津子	排外主義と国際協調主義の間に現実的な妥協点は見出せるか — 北米を事例とする自然的交通権の今日的展開の解明	1年
佐藤 仁	ODA失敗案件の「その後」にみる開発援助事業の長期的評価 — 競争史観から相互依存史観へ	2年
マギー・レオン	移民がもたらす知 — オランダにおけるインドネシア人ケアワーカーの技術の喪失と向上	2年
大築 圭	資本主義フロンティア周縁におけるコミュニティ再生 — モザンビークにおける強制移住に関する民族誌的事例研究	2年
武田 俊輔	限界集落における祭礼・民俗芸能の継承と再編成 — 住民・他出者・移住者・ボランティア間の葛藤と仲介者の役割に注目して	2年
藤田 周	他者の感性の内在的な理解と表現 — ペルーのモダンガストロノミーの文化人類学的研究	2年
チェ・ウォン・ゲン	難民保護のグローバルガバナンスにおける力関係の再形成 — グローバルな市民社会ネットワークとしてのAPRRNの役割	1年
川松 あかり	いかに炭鉱を語り継ぐか — 旧産炭地筑豊の地域住民と共に学び、聴き、考え、語ることを通じた民俗学的研究	2年
安田 章人	「野生」の価値とは何か？ — 北海道およびアメリカ合衆国ハワイ州における狩猟を事例に	2年

お茶っぴ通信

第八回

「なるこ」きょうどうとしよしつくり隊！発足

多様な人々の巻き込み、ただいま実践中！

◎加賀道(トヨタ財団リサーチフェロー)



今年は雪かきが大変でした

今年は全国的に雪の多い年でしたね。雪国にお住まいの皆さま、雪かき作業ご苦労様でした！私の暮らす宮城県鳴子温泉でも、雪かきが一日の仕事の大半を占めるような日が

多いという想いから、仲間5人と任意組織を立ち上げました。

まずは、どんな活動をしたいかを話し合い、組織を紹介するパンフレットやイメージキャラクターを考えました。そして手始めに、子どもが本に親しめる機会を作るべく、駄菓子屋さんを併設した絵本の読み聞かせ会を開きました。また、総合支所や公民館に挨拶まわりをし、協働で取り組んでいくための協力を仰ぎました。「多様な人々の巻き込み」は、トヨタ財団の助成プログラムの応募要件にもなっています。言うは易く行うは難し。市民活動と呼ばれるものが皆無に等しい土地柄のため、市民が主体的に動くことに行政側が

何日もありました。除雪車が家の前にどつきり残していく重たい雪を除けるのは「若手」の私でさえひと仕事で、高齢の方は家から出ることも困難だろうと感じました。雪で倒壊した空き家もあり、地域課題が顕在化した冬だったように思います。

そんな寒い冬でしたが、私の心は熱く燃えていました。地元の総合支所と公民館の合策計画が浮上り、公民館図書室も新しくなることを受け、「なるこきょうどうとしよしつくり隊！」を発足したのです。行政任せではなく、自分たちに必要な図書室とはどのようなものか住民自らが考え、本を読む場にとどまらず、地域の拠点となるような場をつくりたい



隊のイメージキャラクター

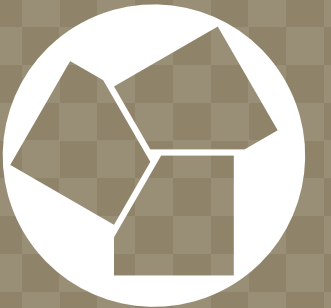
身構えてしまうところがありました。住民側も、私たちの取り組みに理解を示す人はわずかでした。そのような中で、住民フォーラム「みんなが主役 協働でつくる地域の図書



フォーラムの様子

室」を企画しました。参加者を募るため、新聞記者の方に記事掲載を打診したところ、組織紹介も含め大々的に取り上げてくださいました。不思議なこと、記事になつた。たん、外からの見る目に変化し活動への理解が得られやすくなったように感じました。情報発信の重要性は認識していたつもりでしたが、信頼性を高めるためにも有効なこと、実践してみても初めて分かりました。

おかげさまで、フォーラムには行政職員や観光業、農業、自営業、教師、子連れのお母さん(託児サービスも設けました)等、世代や職種を問わず多様な方々の参加がありました。車中で活発な意見が交わされ、市民協働の意識が芽生えた記念すべきフォーラムになったと自負しています。一緒に活動したいという方も多数現れ、活動の推進力も増してきました。先日、ようやくそのフォーラムで出された意見を取りまとめ、要望書として行政に提出してきたところです。トヨタ財団の仕事を通じて出会った素晴らしいプロジェクトの数々から得た「学び」を、今、現場で「実践」している、そんな感じがしています。手探りの日々ですが、仲間とともに楽しみなが奮闘していけたらいいなと思っています。



【国際助成プログラム】
助成対象者との対話(ダイアログ)を実施しました

国 際助成プログラムでは、「アジアの共通課題と相互交流」をテーマに東アジア・東南アジアを対象地域とした助成を行っています。
現在、過去に助成を受けたプロジェクト関係者のご参加をいただき、プログラムオフィサーも交えた数日間の対話とフィールドビジットを行う連続企画を実施しています。この対話を通じて、各自のプロジェクトにおい

法は共通しています。バンコクでの対話企画参加者は、この点について共感するとともに、財団のPOとのコミュニケーションの重要性等についても言及しました。
なお、本企画の最後となる第三回は、3月後半に日本・仙台で行われます。(楠田・利根)



【研究助成プログラム】
伊那市立伊那北小学校6年1組の児童たちによる研究報告会

冬 の気配が残る2月中旬、長野県伊那市を訪れました。「シユンランの咲く里山」を実現する里山管理技術の開発—シユンラン繁殖生態の解明と高木樹種管理による林内環境改善手法の科学的検討—(関連記事22ページ参照)で研究に協力してくれた、小学6年生たちの研究報告会に出席するためです。
発表の場は伊那市立伊那北小学校。プロジェクト代表の黒河内寛之さんは、2016年度から同小学校校長先生をはじめ、先生方、「上牧里山づくり」という地域住民団体の協力のもと、5年生の児童たちに学校近くの里山に入って研究のデータ計測などを手伝っ

てメンバーが直面した課題や重要な学び等の経験・知見を共有するとともに、その様子を後日冊子にまとめて広く発信する予定です。



屋外でのディスカッション

第一回フィリピン・バギオ

2018年1月、第一回としてフィリピンのバギオを訪れました。同地に拠点を持つ山下彩香氏にホストしていただき、他にマルジャ・アシス氏、吉川舞氏、寺田俊氏のご参加をいただきました。

直接お互いのフィールドを訪れて交流する意義、他国のパートナーだけでなく、自国のプロジェクトメンバーの選び方、数値化できない成果(インパクト)の考え方などについて語り合いました。助成を受けたメンバーにとっては自らのプロジェクトの振り返りの機会となっただけでなく、他者のプロジェクト運営についても学び、次の取り組みに活かしていくきっかけと



バギオ市内、高台の会場で参加者と

なったという声が聞かれました。

トヨタ財団にとっても、実際に助成を受けた方々との対話を通して国際助成プログラムで焦点を当てている「実践者による直接かつ相互の交流」の意義を振り返るとともに、今後の取り組みにつながるヒントを得ることができました。

第二回タイ・バンコク

二回をコッチャゴーン・ウオラアーコム氏にホストしていただき、バンコクで開催しました。同氏の設計したチュラロンコン大学100周年記念公園や、プロジェクトのフィールドである郊外の運河沿いのコミュニティを会場に、古山裕基氏、村松伸氏、藤澤忠盛氏のご参加をいただきました。

前回同様、国際助成を担当するプログラムオフィサーも交え、トヨタ財団の助成の独自性や、助成を受けたプロジェクト関係者同士の交流の機会と意義について、率直な意見交換が行われました。



カフェでの対話の様子

てもらってきました。当初は慣れない活動に、先生方や児童たちにも戸惑いがあり、黒河内さんも希望することをうまく伝えられずもどかしいという経験をされたようですが、2017年度には6年生の1クラスに絞って研究への協力が継続され、卒業を控えたこの時期に、その集大成の発表となりました。

当

日は前述の「上牧里山づくり」の方々をはじめ、地域住民の方々や保護者、テレビや新聞社などマスコミも詰め掛け、聴衆は約30人と大盛況。そんななかでも6年1組の児童たちは、物怖じすることなく、1週間前に使用が決まったというタブレットを用いたの研究報告を堂々と行いました。

シユンランの積極的保全に向けた移植方法の検討、シユンランの開花個体と結実個体の分布状況など、5つのグループに分かれての発表は、活動風景の写真のみならず、グラフや1年間かけて集積してきたデータをスクリーンに映しなが



多くの大人たちの前でしっかりと調査報告を述べました

ら進められ、シユンランは人の手が入った森林に多く生息すること、蜜が少なく受粉しにくいため結実個体は1〜4%にしかならないことなど、小学生とは思えないほどの高度な研究結果



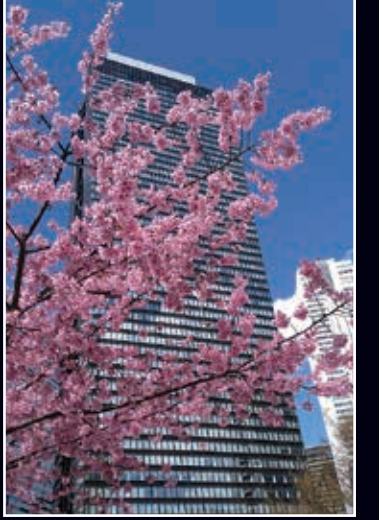
復興に抗する—地域開発の経験と東日本大震災後の日本

- 発行：有志舎
- 編者：中田英樹、高村竜平
- 価格：2,600円+税

PUBLICATIONS

2012年度研究助成プログラム助成対象プロジェクト「原発災害を契機とした『国内植民地』構造再編の把握—「公害」の経験を参照軸とした新たな農業・農村研究の構築—」(代表者：中田英樹氏)より成果物が出版されました。

を発表。発表後には質疑応答も活発に行われ、根拠となる情報を示して解説することで、大人たちの疑問点に次々と回答を出しました。
身 近にある里山に「調べる」という視点をもって向き合うことで、里山にはどのような植物があるのか、その植物の生育状況を左右するものは何なのかなど、児童たちは仮説を立て、調査して報告するという研究活動の基本を学ぶことができたと同時に、さまざまな視点で物事を検証し、とらえるという力が身に付いたのではないかと思います。この経験から、将来研究者を目指す生徒が出てくるかもしれません。(新出)



トヨタ財団のある新宿三井ビルを背景に桜の花が咲いていました。[Y.N.]

【編集後記】

LAST WORD

●40年前の話で恐縮ですが、私は大学時代に弓道をやっておりまして、大学2年の時の全日本学生弓道選手権大会に於いて、何と個人戦準優勝を果たしました(それが私の唯一最高の戦績です)。準優勝という辺りが如何にも私の奥ゆかしさを表していると思うのですが、そのようなことはともかくとして、以来、私の持論は「適度な緊張感では集中力を高め、良い結果をもたらす」というものでした。

ところが、先日の平昌オリンピックにおける女子カーリングチームの活躍を見ていて、「笑顔の力」の方がより優れているなあと、今更ながら考えを改めました。決して彼女たちが緊張感無くゲームをしていたとは思いませんが、彼女たちは仲間のミスに対しても決してネガティブな言葉は言わず、仲間や相手に対するリスペクトを忘れず、常に笑顔をやしませんでした。結果として、「メダガネ先輩」率いるピリピリムード漂う韓国チームには負けましたが、初のオリンピック銅メダルを獲得しました。

つくり笑顔でも同様の効果はあるようですから、こころ一番という時は、意識して笑ってみてはどうか。[M.O.]

●今号の特集でご紹介のあった甌島。私も一昨年11月に、プロジェクトの一環で開催された「KOSHIKI FISHERMANS FEST」に参加するために島を訪問しました。イベントは、漁師と消費者と顔の見える関係性を築く場として開催されています。会場の中央には円形の屋台が設置され、円の中央に漁師さん、周りを来場者が囲み、話しながらとれたての海産物を食べるのができます。お揃いのTシャツ姿で並んでいる漁師さんの姿がかっこよく、その前に並んでいる魚は日が当たりキラキラしていて、ぐるぐる回りながらついついあれもこれもと食べ過ぎ、ビールも進む楽しいイベントでした。

木製の円形屋台とお揃いのTシャツ、やぐらに大漁旗が飾れている空間が、とても素敵でわくわくしたことを思い出します。これもまたデザインの手だなくと思いつきました。また行きたいなあ……。[R.K.]

●「農」を特集テーマにした前号は大変反響が大きく、たくさんのご感想をお寄せいただきました。

した。一部ですが、ご紹介いたします。☆阿蘇が民間の取り組みから農業遺産に認定されたということは知りませんでした。まさに文化としての農。インタビュのパートは一冊の本と思えるくらい濃い内容で勉強になりました。☆農だけでなく、いかに動植物を含めた自然と共生するのが課題でしょう。

今号は「アート」を特集のテーマにいたしました。が、いかがでしたか。ご意見、ご感想など同封のハガキにてお寄せください。[Y.N.]

●●●役に立つかわからないけど、面白そうだからやってみたら結果的に地域社会に貢献する、みたいなことが時々あります。おそらく「アートの役割」とはそんなことです。近代はエンジニアリング式の予定調和をめざす「ミッション遂行型」プロジェクトが優位な社会ですが、近代自体の行き詰まりが指摘されているいま、これまでの一元的な価値観を変えるには「好奇心駆動型」のアート思考がときに必要なのではないかと。今号の特集を読んでそんなことを思いました。[I.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

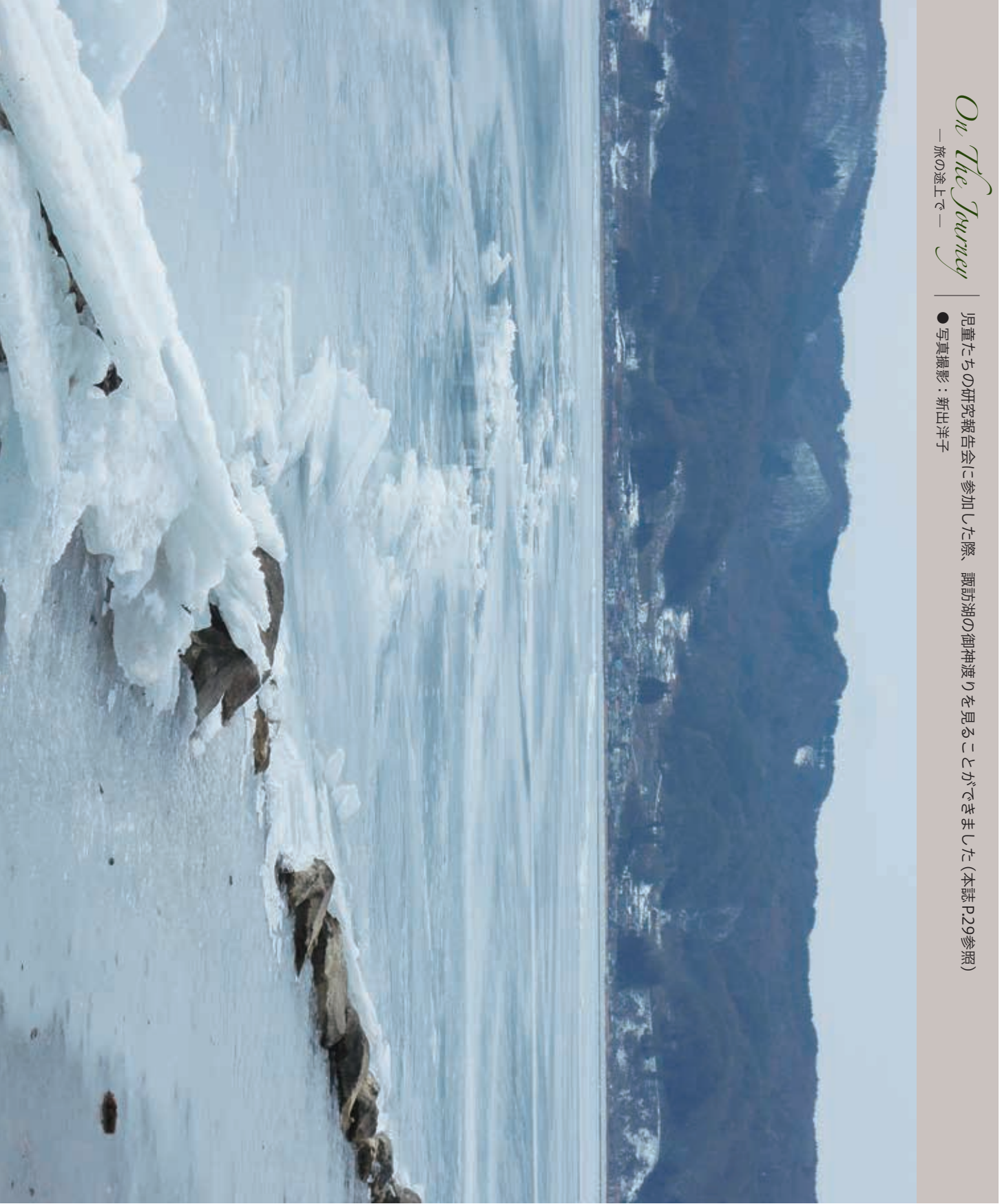
JOINT [ジョイント] No.27

発行日 2018年4月13日
発行人 浅野有
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <http://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey
—旅の途上で—

児童たちの研究報告会に参加した際、諏訪湖の御神渡りを見ることができました(本誌P.29参照)
●写真撮影：新出洋子



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION

